

令和 2 年 5 月 31 日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02385

研究課題名(和文) 前近代における巨大地震の家屋倒壊率と死者数の研究

研究課題名(英文) Analyses of house collapse ratio and number of deaths in the history of pre-modern Japan

研究代表者

矢田 俊文 (Yata, Toshifumi)

新潟大学・人文社会科学系・フェロー

研究者番号：40200521

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,200,000円

研究成果の概要(和文)：1710年伯耆・美作地震、1804年象潟地震の家屋倒壊数、死者数を明らかにした。1828年三条地震における一軒当たり死者数が0.28人であることを明らかにした。被害報告書は代官等が示す雛形に従って作成され、雛形作成の目的は夫食米等貸与の資料作成のためのものであったことから、半潰数は家屋倒壊率を導き出す被害数としては使用するべきではなく、家屋倒壊率は全壊家屋数を全家数で除したものをパーセントで示したものである、とすべきであることを明確にした。『歴史学による前近代歴史地震史料集 2』を作成し、家屋倒壊率・一軒当たり死者数、半潰等の被害の具体像を示す史料を掲載した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、家屋倒壊率は、 $(全潰戸数) + 0.5 \times (半潰戸数)$ を全戸数で除したものをパーセントで示したものの、という計算式で行われていたが、半潰戸数を全壊戸数の50パーセントとする根拠はなく、家屋倒壊率は、全潰戸数を全戸数で除したものをパーセントで示したものとすべきだということを明らかにしたことは、従来の前近代の震度の再検討をせまるもので、今後の地震防災に貢献するものとなった。また、活断層附近の一軒あたり最大死者数(0.28人)を明らかにした点も、今後の地震防災に貢献するものとなっている。

研究成果の概要(英文)： In 1710 Hoki・Mimasaka Earthquake and 1804 Kusakata Earthquake, We were clarified house collapse ratio and number of deaths. In 1828 Sanjo Earthquake, We were clarified maximum death toll per house is 0.28. The house collapse rate is derived by dividing the total number of destroyed houses by the total number of houses.

We have made out the historical earthquake records "Rekishigakuniyori Zenkai Zishinshiryohshu 2"

研究分野：地震史料学

キーワード：前近代 地震 家屋倒壊率 死者数 中世 近世 半潰 皆潰

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

従来の前近代の地震研究は、地震学等の理系中心に行われてきた。その成果は、毎年発行される『理科年表』の「日本付近のおもな被害地震年代表」や宇佐美ほか 2013 で公表されている。これらに記される前近代の地震の震度、マグニチュードや死者数は歴史学研究者が使用する史料と同じものを使って導き出されている。しかし、歴史学の方法によりこれらを再検討すると、理系によって行われた家屋倒壊率の導き出し方や死者数は正確ではない。

2. 研究の目的

本研究では、近世以前の巨大地震の家屋倒壊率・死者数を明らかにする。文書等だけでなく地形・地質の検討も行い、地域ごとの家屋倒壊率・死者数を明らかにし、それぞれの地域の被害の特徴を明確にする。巨大地震のなかでも元禄地震、宝永地震、安政江戸地震の家屋倒壊率・死者数を明らかにする。理科年表、宇佐美ほか 2013 等にある理系研究者が推定した家屋倒壊率・死者数を修正し、このことによって防災・減災に貢献する。

さらに、家屋倒壊率の導き出し方、死者数の導き出し方を確立し、前近代の地震における家屋倒壊率・死者数研究の基礎を確立する。

3. 研究の方法

前近代の地震における家屋倒壊率と死者数とその原因を導きだす基礎的研究を行い、その方法を提示する。そのために以下の調査・研究を行う。

(1) 1703 年元禄地震・1707 年宝永地震・1855 年安政江戸地震を中心に、皆潰数・半潰数・死者数が記された史料の原本調査を行い翻刻し、家屋倒壊率を出し、死者の所在地を特定する。(2) 家屋倒壊率と死者数を確定できた地点と死者所在地の地形分析を行い、死亡理由がどのような地形によるものかを明らかにする。

4. 研究成果

(1) 地震史料集の刊行

地震史料を原本によって翻刻し、『歴史学による前近代歴史地震史料集 2 近世以前地震家屋倒壊率・死者数基礎資料』に収載し公表した。『新収日本地震史料』等の既刊地震史料集所収に収められている史料についても原本によって検討し直して掲載している。本史料集は史料編・図表編・特論で構成される。史料そのものを掲載するだけではなく、日記など長期間にわたる大量の記録を数値や計数として把握したときの分析結果を表で示したものを掲載している。地震家屋倒壊率や死者数もそのひとつである。地震被害絵図のトレース図もここにまとめて掲載した。

本史料集は防災・減災に役立てるための史料集をめざしたものである。そのために、本史料集では、原本等の調査による翻刻と注釈、さらに必要に応じて現代語訳もつけた。史料群ごとに解説を付し、末尾にはそれぞれの地震に対応する史料がわかるよう歴史地震目録をつけた。

(2) 地震被害数の検討

1703 年元禄地震における伊豆大島の被害の検討をおこなった。伊豆大島の潮音寺「大過去帳」の分析により、関東地域に大きな被害を与えた元禄地震の際に、伊豆大島西部にも、地震及びそれに伴う津波による死者が多数出たこと、三原山噴火の 1~3 年後に大きな飢饉があることを読み取ることができた。

1707 年宝永地震大坂に在住していた俳人岡西惟中は大坂の死者が 2 万人余であったという確かな被害情報を得ていてそれを「大地震祈禱連歌」に記したことを明らかにした。

1710 年伯耆・美作地震では伯耆東三郡の河村郡・久米郡・八橋郡で潰家 1912 軒、死者 75 人の被害があり美作地域にも被害がおよんだこと、1711 年伯耆・美作地震では、美作国大庭郡・真島郡に潰家 118 軒、半潰 141 軒の被害があり、伯耆東三郡を中心に潰家 380 余軒、死者 4 人の被害があったことを明らかにした。

1804 年象潟地震の全体の被害数については、従来の研究は由利郡庄内藩預所の被害数の検討が不十分であった。『庄内大變記』には由利郡庄内藩預所の 7 か村の被害数が記される。この 7 か村の被害数を加えることにより 1804 年象潟地震の家屋倒壊・死者全体の被害数(潰家総数 6252 軒、死者 387 人)を明確にした。

1855 年安政江戸地震の被害の中心地からすこし離れた江戸周辺部の武蔵国の葛西領・多摩地域・川崎領の 1855 年安政江戸地震と 1856 年安政台風の被害について、家屋被害率・死者数の検討を行った。検討の結果、葛西領下之割笹ヶ崎村の家屋被害はほぼ同じである以外は、すべて安政江戸地震の被害よりも安政台風の方が大きいことを明らかにした。

(2) 家屋倒壊率のための史料の検討

家屋倒壊率を導き出すために地震被害報告書の検討を行い、検討の結果、家屋全壊率を家屋倒壊率とすることが妥当であるとした。1707 年宝永地震被害報告書の記事のうちで町家・民家の被害の事例 143 例を検討すると潰・半潰・大破という順で記される例は全体の 22 パーセントであったこと、1854 年嘉永東海地震の被害について東海道三島宿は同じ被害とその被害数を道中奉行には半潰 47 軒、代官には大破 47 軒と報告していること、1855 年安政江戸地震の被害では武蔵

国葛飾郡笹ヶ崎村は代官が示した被害報告書の雛形に従って被害報告書を作成し提出していたこと、代官の雛形作成の目的は夫食米・夫食金貸与のための資料作成のためのものであったことから半潰率は家屋倒壊率を導き出すための被害数としては使用するべきではなく、家屋全壊率を家屋倒壊率とすることが妥当であるとした。

(3) 地震被害程度・被害用語の検討

1854年安政東海・南海地震と連日で大きな地震を受けた三河国は、前者は地震自体、後者は津波と被害の傾向が異なった。また、西三河に少し強く被害は現れたようで、西三河では家屋の「潰れ」に加え、粒状化現象等の被害があった。なお、地震被害には、「潰れ・大損じ・大破損」「大半潰・半潰・中潰」「破損」の基準があったことを明らかにした。

和泉国北部の三卿領において、1854年安政東南海地震に際して作成された被害報告の特徴に注目し、全壊に及ばない被害の態様を示す指標として、柱の捻れや、居住の可・不可があることを導きだし、半潰などとまとめられる被害状況の具体像を明らかにした。

1854年の安政(嘉永)南海地震とその二日後に発生した安政伊予西部地震に関する史料について、九州東部の大分県と宮崎県の史料保存機関において調査・収集を実施した。収集した史料の中から日記史料を用いて、地震の揺れの大きさや地震による家屋の被害程度を示す記述を抽出し、当時の家屋の構造を踏まえて、史料中の表記と被害の実態について整理・検討した。その結果、江戸時代末期の九州東部(豊後国東部・日向国北部)における地震による家屋被害の分類と推定震度を提示できた。また、連続して発生した巨大地震(安政南海地震)と大地震(安政伊予西部地震)による家屋被害を区別できる複数の事例から、二度目の大地震によって家屋被害が拡大していく過程が確認できた。

(4) 一村あたり死亡者数の検討

活断層附近の最大一軒あたり死亡者数は0.28人であることを明らかにした。地盤が軟弱な地域の場合、地震による家屋倒壊率は90パーセントを超えることもあるが、一軒当たり死亡者数はそれほど高くはない(1828年三条地震の場合、中野西村0.08人・中野中村0.13人、中野東村0.07人。新潟県長岡市)。一軒当たり死亡者数が高くなるのは活断層近くの地域の場合である。1828年三条地震の場合、活断層近くのナギ野村(新潟県見附市)の一軒当たり死亡者数は0.27人、和田村・時水村(見附市)では0.28人であった。一軒あたり死者数0.28人は各地で検討するための基準数値になるであろう。

(5) 地震史料の研究

1361年康安元年の地震に関して『太平記』の記述を検討し、以下のことを明らかにした。第1は、一次史料では確認されない阿波由岐の被害記述は、その数字も含めて『太平記』諸写本に変化はなく、古い段階から存在したと推測される。『太平記』が言及する被害地である由岐、難波浦、四天王寺、熊野すべてに共通するのは熊野とのつながりであり、『太平記』の同地震被害の記述の背景には、阿波国、由岐への熊野信仰の浸透および三山検校と義満期室町殿権力の繋がりがあった。第2に、地震の始まりと継続時期についても『太平記』諸本の記述は不正確さをはらみつつも一次史料とほぼ対応しており、『太平記』には、一次史料と比較すると「六」と「八」の読み違いが早い時期からあったと判断される。第3に、鳴戸の潮位が変化し岩の上に太鼓が現れたとする、いささか荒唐無稽な記述である。その場所は諸本により、「周防鳴戸」と「阿波鳴門」に分かれるが、古くは遣新羅使が立ち寄ったことで古代から知られる「周防鳴戸」である可能性が高いが、現実の潮位の変化が「阿波鳴門」になかったとは即断できず、あるいはどちらにも起こった可能性がある一方、注目したいのは太鼓の革張りの素材の記述である。水牛皮と記すものとそうでない写本に分かれる。水牛は日本では、仏教的な説話に登場するものの、飼育はされていない珍しい動物で、その皮が輸入されるのは南蛮貿易以降と考えられ、それ以前に太鼓の革張り素材として一般的であったとは必ずしも考え難い。そのとき注目されるのは、文明4年9月に大内氏を尋ねて水牛が上洛したという風聞が京都で広く立っらしい事実である。この風聞の時期と当時すでに語り物として広く普及していた『太平記』諸写本の成立時期とは深く関わっていると推測される。ちなみに革張り素材を不詳とするのは西源院本のみである。近年、日本文学の『太平記』研究の立場からは、巻三十六については同本の古態性に疑義が呈され広く認められているようであるが、この点は、日本史における同地震研究においても活用する『太平記』同巻諸写本の時期にきわめて興味深い論点を提供すると考えられる。

15世紀の越中における地震と津波について、酒井英男氏らが、富山市の四方背戸割遺跡・打出遺跡の噴砂の年代を、残留磁気と地磁気変化との対比による年代推定法などにより15世紀半ば(1450±50年)とした(酒井ほか2011・2019)。酒井氏らの史料(文安5年・1448年の地震津波記事)の扱い方には誤りがあるため、典拠史料にさかのぼり、歴史学から再検討を行った。文安5年の地震津波記事は、武内七郎編『越中水害年譜資料』(1910年)所収の記事であり、同書によればその典拠は「珍事覚帳」「今村日記」「渡辺文章」とされるが、この3点の史料の原本は現時点で確認できないため、『越中水害年譜資料』の典拠史料の記載方法や関係性などにより史料学的な検討を行った。その結果、「珍事覚帳」「今村日記」「渡辺文章」の少なくとも15世紀以前のの記事は、近世に刊行された『和漢皇統編年合運図』の記事をもとに加筆文飾した

年代記である可能性が高く、文安5年の地震津波記事内容を信頼するのは難しい。したがって、現時点において、歴史学からは15世紀に富山市地域で噴砂を生じさせるほどの地震が起きたことを示す史料は確認できないとした。

年代記『勝山記』の史料学的な検討を行い、『勝山記』は、記録の出典の違いにより、a. 寛正6年以前、b. 文正元年～天文初年頃、c. 天文初年～永禄6年の三つの時期に区分され、c. の時期の記録は編纂者の実体験が反映して信頼できるが、b. の時期の記録は伝聞・伝承等を参考に編集しているため誤りや混乱が多く、15世紀後半の記録は年代記『鎌倉大日記』のほうが信頼できることを明確にした。

三河国渥美郡堀切村（田原市堀切町）の『常光寺王代記并年代記』について、記事の内容や記述方法、筆跡などの変化や違いを史料学的に検討・分析し、信頼できる地震および自然災害関連の記事を抽出し紹介した。検討には大倉精神文化研究所附属図書館所蔵の影写本（1929年写）を用いた。その結果、a『常光寺王代記并年代記』は、天文10年（1541）までに常光寺三世の樹王によりまとめられ、その後は断続的に2人により加筆され、天正10年（1582）から慶長10年（1605）までの記事は恩海により加筆され、元和8年（1622）から享保3年（1718）までの記事は少なくとも11人により書き継がれたこと。b『常光寺王代記并年代記』の「年代記」において樹王が生きた文正元年（1466）以降の記事はそれぞれ、すべて同時代史料として位置づけることができ、伝聞・風聞記事などを除けば、記主が実際に体験したものとして信頼できること、を明らかにした。

1596 文禄五年の地震に関して文書の検討をおこなった。結果は次の通りである。閏七月九日には豊後、伊予で大地震があり、京都や大隅、薩摩でも揺れを感じていたことが知られるが、安芸国厳島周辺でも、九日夜の地震は物々しい大地震として関係者を驚かせた。十四日時点でも当地では余震の継続が確認される。ただ、十四日まで地震による目立った被害は、厳島神社の主要建築物ほか桜尾城や各屋敷にも認められていない。

『新収日本地震史料』にも少なからず所収されている盛岡藩の家老席日記『雑書』と、同藩家老の「北可継日記」の地震記録を、原本やマイクロフィルムを用いて確認・補訂した上で、寛永末年から享保年間までのデータを一覽にし、さらに数値化・グラフ化し検討した。盛岡という定点の地震の特徴について考察し、局所的な地震が多かったことや、『雑書』の史料的な限界などを指摘した。また、『新収日本地震史料』利用上の問題点を明確にした。

元禄16年11月23日の地震により、武蔵国入間郡赤尾村では田畠92筆に地割れが起こった。それは、直接川とは面しない畠地に幅広く起こった地割れであったと推測される。一方、年貢減免などの措置は一切見られない。これは地震があった時期が収穫後となる11月末であったことと、翌年迄には修復可能であったことを示すと考えられる。

1833 天保4年庄内沖地震、1847 弘化4年善光寺地震等において、従来知られていなかった史料を発掘、または従来地震・津波と無関係のものとして認識されていた史料を津波被害の史料と確定し、これらの地震被害の具体像を明らかにした。

1854 善光寺地震の被害を示す史料は非常に多く残されているが、a. 村が作成したもの、b. 藩の郡奉行クラスに集められたものが被害状況を正確に伝えており、c. 家老や江戸で集められた情報はかなり整理された情報となっている。また、d. 行政組織以外で作成された情報は、検討する情報としては正確さが劣るものと考えられる。このような4つの分類にしたがって地震史料を扱うことにより、地震被害の情報の正確さの分類をすることの重要性を明確にした。

（6）地震被害絵図の検討

1854 年南海地震による津波被害を可視的な形で表現した『震潮記』所載「宍喰浦荒図面」「宍喰浦荒図面」の検討をおこない、居宅の近隣や社会的に近しい家についての被害を、より詳細に描いており、信頼性が高いことを明らかにした。ついで、絵図の凡例からみて、作成者は、流家、潰家、痛み潰家、潮入家、無難家、という尺度で被害を評価し、描き分けていることを明らかにした。

1854 年南海地震津波による大坂市中の被害を描いた瓦版絵図のうち、従来、同版ととらえられてきた2種の瓦版絵図について詳細な検討を行った。その結果、石本コレクションの「嘉永七年寅霜月 大坂大地震（仮）」の版が最初に刷られ、その後、知られた情報が追加される形で「大坂大津浪図」が刷られた可能性が高いことが明らかにした。

輪島における地域ごとの地震津波被害の状況を文献資料に基づいて確認した上で、ついでそれをGPS測量によって得られた微細なレベルでの地形の特徴との関係を検討した。検討結果は次の通りである。1833年の庄内沖地震による輪島の被害は、河原田川左岸では津波による家屋等の流失が顕著であるのに対して、右岸では家屋等が倒壊していても流失していない。これは津波の押し寄せてきた方向とも関係すると考えることもできるが、地形的な差異の影響が大きかったと考えられる。1軒あたりの死者数は、河原田川左岸の海士町で特に少ないが、左岸全体と右岸とで比較した場合、同数となる。家屋被害が左岸で多かったこととあわせて考えるならば、被災状況を考える上で示唆的である。地震津波について描いた資料として注目されてきた「輪島河合町本通・浦浜通絵図」は、死者数や家屋被害数の記載が、当時のより信頼性における史料との齟齬があることについては今後の検討が必要である。一方で、絵図は当時の河合町の市街地全体を描画しておらず、描画範囲は津波の到達範囲と考えられる。さらに、絵図で絵画的に描写される、いろは橋は、津波の河川にそった遡上により破損したことを背景とし

て描かれていた可能性がある。

(7) 津波堆積物の検討

静岡県西部の太田川低地から7世紀末と9世紀末の津波堆積物を発見し、歴史記録上未確認であった2回の東海地震の発生を確認した。南海地震が684年と887年に発生したことは歴史記録にあるが、同時代の東海地震については確実な歴史記録がない。特に887年の南海地震では東海地域も含む広い範囲で強い揺れを感じたという記録があり、今回の津波堆積物の発見により東海地震も同時に発生したことが確認された。これにより過去1300年について東海地震がいつ発生し、それが南海地震とどのようなタイミングであったかをより詳しく明らかにした。

引用文献

宇佐美龍夫ほか『日本被害地震総覧 599-2012』東京大学出版会、2013

酒井英男「年代推定 自然災害の痕跡を追う」中條利一郎ほか編『考古学を科学する』臨川書店、2011

酒井英男ほか「噴砂の磁化による古地震の年代推定-御館山遺跡と四方背戸割遺跡において-」『情報考古学』24, 2019

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計29件（うち査読付論文 21件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 18件）

1. 著者名 矢田俊文	4. 巻 12
2. 論文標題 俳人岡西惟中と一七 七年宝永地震における大坂の被害数	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 災害・復興と資料	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 片桐昭彦	4. 巻 12
2. 論文標題 災害記録としての『常光寺王代記并年代記』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 災害・復興と資料	6. 最初と最後の頁 8-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 原田和彦	4. 巻 12
2. 論文標題 一八四七年善光寺地震における善光寺町の被害	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 災害・復興と資料	6. 最初と最後の頁 64-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 浅倉有子	4. 巻 12
2. 論文標題 盛岡藩『雑書』・「北可継日記」の地震記事の再検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 災害・復興と資料	6. 最初と最後の頁 20-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西山昭仁	4. 巻 12
2. 論文標題 江戸時代末期の九州東部における地震による家屋被害の分類	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 災害・復興と資料	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 谷口 央	4. 巻 12
2. 論文標題 伊豆大島の災害と死者数の関係 - 近世期過去帳の統計紹介 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 災害・復興と資料	6. 最初と最後の頁 55-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 堀 健彦	4. 巻 12
2. 論文標題 『震潮記』所載「穴喰浦荒凶面」の基礎的考察 - 1854年南海地震津波被害を考えるために -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 災害・復興と資料	6. 最初と最後の頁 38-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Osamu Fujiwara, Akira Aoshima, Toshiaki Irizuki, Eisuke Ono, Stephen P. Obrochta, Yoshikazu Sampei, Yoshiki Sato, Ayumi Takahashi	4. 巻 227
2. 論文標題 Tsunami deposits refine great earthquake rupture extent and recurrence over the past 1300 years along the Nankai and Tokai fault segments of the Nankai Trough, Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Quaternary Science Reviews	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.quascirev.2019.10	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 小野映介	4. 巻 666
2. 論文標題 京都盆地東縁，白川扇状地における更新世末以降の堆積環境の変遷	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館文学	6. 最初と最後の頁 56-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 矢田俊文	4. 巻 16
2. 論文標題 地震被害評価方法の再検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 資料学研究	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 矢田俊文	4. 巻 11
2. 論文標題 1718年享保伊那・三河地震と『月堂見聞集』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 災害・復興と資料	6. 最初と最後の頁 9-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 原田和彦	4. 巻 11
2. 論文標題 支配階層別にみた地震情報の収集について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 災害・復興と資料	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田和彦	4. 巻 11
2. 論文標題 一八五四年安政東海地震（嘉永の東海地震）と信濃の被害	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 災害・復興と資料	6. 最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原直史	4. 巻 16
2. 論文標題 個人による震災被害記録と客観性 善光寺地震の新出史料をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 資料学研究	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 堀健彦	4. 巻 11
2. 論文標題 1854年南海地震による大坂市中の津波被害を描いた瓦版絵図について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 災害・復興と資料	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小野映介	4. 巻 63
2. 論文標題 沖積低地の氾濫原を対象とした地形分類図作成に関する課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地理	6. 最初と最後の頁 68-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢田俊文	4. 巻 15
2. 論文標題 1855年安政江戸地震と1856年安政台風の被害数 武蔵葛西領・武蔵多摩地域・武蔵川崎領	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 資料学研究	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 矢田俊文	4. 巻 10
2. 論文標題 史料から見た一七一年伯耆・美作地震と一七一年伯耆・美作地震	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 災害・復興と資料	6. 最初と最後の頁 13-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西尾和美	4. 巻 10
2. 論文標題 文禄五年閏七月地震とその被害	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 災害・復興と資料	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 原田和彦	4. 巻 10
2. 論文標題 新潟市立新津図書館の善光寺地震史料について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 災害・復興と資料	6. 最初と最後の頁 19-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原田和彦	4. 巻 19
2. 論文標題 新津図書館蔵 善光寺地震関係絵図について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 長野市立博物館紀要－人文－	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原 直史	4. 巻 10
2. 論文標題 新潟町における天保4年庄内沖地震津波の被害と情報	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 災害・復興と資料	6. 最初と最後の頁 9-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 片桐昭彦	4. 巻 10
2. 論文標題 明応関東地震と年代記 『鎌倉大日記』と『勝山記』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 災害・復興と資料	6. 最初と最後の頁 68-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀健彦・小野映介	4. 巻 10
2. 論文標題 1833年庄内沖地震による輪島の津波被害の地域的差異と微地形	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 災害・復興と資料	6. 最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計22件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 堀 健彦
2. 発表標題 『震潮記』所載「穴喰浦荒凶面」にみる1854年南海地震津波被害
3. 学会等名 日本地理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 原 直史
2. 発表標題 安政地震における泉北地域の家屋被害について
3. 学会等名 第7回前近代歴史地震史料研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 片桐昭彦
2. 発表標題 15世紀の越中における地震と津波
3. 学会等名 第7回前近代歴史地震史料研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 谷口 央
2. 発表標題 三河国「形原役所記録」に見る安政東海・南海・江戸地震の被害把握とその影響
3. 学会等名 第7回前近代歴史地震史料研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西尾和美
2. 発表標題 康安元年(1361)の地震と阿波 『太平記』の記述をめぐって
3. 学会等名 四国中世史研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤善輝・小野映介
2. 発表標題 浜松市伊場遺跡群における環境変遷と伊場大溝遺構の起源,
3. 学会等名 2019年日本地理学会秋季学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野映介, 小岩直人
2. 発表標題 完新世後期の青森平野南部において生じた急激な地形環境変化
3. 学会等名 2019年日本地理学会春季学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西尾和美
2. 発表標題 康安元年(1361)の地震とその史料
3. 学会等名 第6回前近代歴史地震史料研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 谷口 央
2. 発表標題 伊豆大島の災害と死者数の関係-近世期過去帳の統計から-
3. 学会等名 第6回前近代歴史地震史料研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原 直史
2. 発表標題 弘化4年(1847)善光寺地震の新出資料をめぐって
3. 学会等名 第6回前近代歴史地震史料研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 矢田俊文
2. 発表標題 前近代における災害史研究の方法 地震・台風
3. 学会等名 第68回新潟史学会研究大会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小野映介
2. 発表標題 考古遺跡からみた日本列島の地形環境の多様性
3. 学会等名 日本第四紀学会ジオパークシンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 片桐昭彦
2. 発表標題 年代記にみる中世後期の地震 『常光寺王代記并年代記』と明応2年の地震
3. 学会等名 第6回前近代歴史地震史料研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 矢田俊文
2. 発表標題 1710年・1711年伯耆国・美作国の地震と史料
3. 学会等名 歴史地震研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 片桐昭彦
2. 発表標題 年代記にみる明応の地震 『鎌倉大日記』と『勝山記』
3. 学会等名 第5回前近代歴史地震史料研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 谷口 央
2. 発表標題 元禄16年関東地震の地割れ被害
3. 学会等名 第5回前近代歴史地震史料研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西尾和美
2. 発表標題 「文禄5年間7月地震」再論
3. 学会等名 第5回前近代歴史地震史料研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原 直史
2. 発表標題 支配錯綜地域における災害情報の集積について 越後三条地震・庄内沖地震を中心に
3. 学会等名 第5回前近代歴史地震史料研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 矢田俊文, 浅倉有子, 片桐昭彦, 齋藤瑞穂, 谷口央, 西尾和美, 西山昭仁, 原直史, 原田和彦, 堀健彦	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新潟大学人文学部	5. 総ページ数 124
3. 書名 歴史学による前近代歴史地震史料集 2 近世以前地震家屋倒壊率・死亡者数基礎史料	

1. 著者名 矢田俊文	4. 発行年 2018年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 248
3. 書名 近世の巨大地震	

1. 著者名 浅倉有子, 松田慎也, 畦上直樹, 小島伸之, 中平一義, 橋本暁子, 吉田昌幸, 矢部直人, 山懸耕太郎, 下里俊行, 志村喬, 茨木智志	4. 発行年 2018年
2. 出版社 風間書房	5. 総ページ数 290
3. 書名 社会科教科内容構成学の探求	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西山 昭仁 (Nishiyama Akihito) (50528924)	東京大学・地震研究所・助教 (12601)	
研究分担者	浅倉 有子 (Asakura Yuko) (70167881)	上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授 (13103)	
研究分担者	原 直史 (Hara Naofumi) (70270931)	新潟大学・人文社会科学系・教授 (13101)	
研究分担者	川岡 和美 (西尾和美) (Nishio Kazumi) (80248343)	ノートルダム清心女子大学・文学部・教授 (35305)	
研究分担者	堀 健彦 (Hori Takehiko) (80313493)	新潟大学・人文社会科学系・准教授 (13101)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小野 映介 (Ono Eisuke) (90432228)	駒澤大学・文学部・准教授 (32617)	
研究分担者	谷口 央 (Taniguchi Hisashi) (90526435)	首都大学東京・人文科学研究科・教授 (22604)	
研究協力者	原田 和彦 (Harada Kazuhiko)		
研究協力者	片桐 昭彦 (Katagiri Akihiko)		